

國体出場を語る

山岳部 高村 泰雄

國体に参加する山岳部員選手はA、B、C班に分かれ、A、B班は十月二十六日夜、大阪駅を出発し、広島に回つた。C班は一夜遅れて大阪築大社行で直接伯耆大山へと向つた。このA、B、C班の分け方は、A、B班は正選手で各原より三名選られ、C班は準選手でこれは任意である。その為非常に人数が多くなり、A、B班は団体開催地向つたが、C班だけは直接大山に向ふようになつた。

二十七日(A、B班)
一時から開かれた第六回國体入場式に臨んだ。入場式終了後山岳部門の開催地大山に向ふ為夜行で広島、姫路、宍粟、中津生のハート二カ

団の吹奏に迎えられて、溝口駅、車、溝口町の歓迎祝賀を繰え、町の人々に送られ十数台のバスに分乗大山へと向つた。真正面にそびえる大山は、広大なスロープを紅く染めながら富士の如く、大地から登り上つているバスの終着地、樹水原で、地元民衆、安菜節に迎えられ、小憩の後、大山寺部落に向つて出発。寢不足の体には肩のサツクが重い。部落について宿泊所山の家に入ると、大阪のC班が既に到着して居りやつと落着いた気がする。

二十八日(A、B班)
大山の八合目あたりを、ガスが流れている、紅葉に埋つた行替谷か

ら、ジグザグにつめて、夏道合目と出合つ。キヤラ木帯を抜けて頂上に着くと、断崖側が大きくおしよるの目下に見える。ここから尾根を縦走して、ユートピアへ、宝珠尾根を下つて、博労座に下山。
(C班) 朝九時ごろ米子に着き、バスに乗車して大山寺部落へと車は進んだ。午後八時入山式があつた。國体第一日の行事は一応終了。二十九日(A、B班) 昨日下つた宝珠尾根を下から取つ附きユートピアに至る。甲ヶ山への縦走を初め細い尾根筋をどンドン飛ばして歩いた。この尾根通しには時々面白い部分があり、中でも稲指ビシク

等は十米種の岩峰が二ヨツキリと尾根の真中に稲指状に突き立ち、その上を越えて行く道が細くついで居たり、尾根がやせて両側が切り立、岩を踏みはすせば、一気に落ち行くところもあつた、大

体峠で昼食をとり、矢倉山への登りを行くと、ガスが晴れ、しばらくの間だったが、大山の主峰方面が見えた。最後の甲ヶ山への登りは、一寸した岩登りルートで落石を気にしながら連続登攀した。甲ヶ山よりの下りは、全くの直降で木の幹にしがみついたり、前につんのめつたり、まるでスキーで滑っている様な急激な下りだつた。中には、グリセードのように木をもつて、落葉の上を滑つて行く人も居た位だつた。かくして甲ヶ山下り、大山の裾野を廻つて、博労座に帰着、國体登山を無事に終えることが出来た。

二十九日(C班)
博労座より夏路登山道を経て頂上へ登る。昼食をすませて縦走路を行く。この道の險悪な事は類を見ないだろう。砂の上に乗つては、それに足をのせる

と崩れてしまつたのである。縦走路を経て宝珠尾根に下り、中宝珠あたりの鞍部から元谷へと二気に下つてしまひ博労座へ帰解散した三十日(C班) 第二日の行程は宝珠山へ登り、阿弥陀川を行きて川床で昼食を終え博労座へと足を運んで解散となつた。夜、大阪に特別に日本山岳会長種有恒氏のお話を聞きに行き、ほくらは大変良い刺激を受けて、我々のモットーとして行きたいと思つた。

三十一日(C班) いよいよ國体も今日で幕を閉じる事になつた。大山寺部落からバスで米子へ向つた。二日間の出行を各自思い思いに脳裏にしまひながら……米子市に着くと米子市民の心からなる歓迎を受けた。米子の小学校で閉会式が行われ、第六回國民体育大会登山部門の幕を無事閉じる事となつた。